市民が実践者に変化する仕組みの考察②

触媒役の重要性と行政が果たす役割の可能性

常葉大学：安武伸朗、荒石磨季、下山絢香、渡邊聡美

1 研究の背景と目的

前稿では、デザインリサーチにより市民がまちづくりの実践者に変容するきっかけと必要な体験や意識をモデル化した。本稿では行政と市民が共創できる街になるためのメカニズムを考察する。

▲前稿の取材対象者

2 実践者に変容するステップの考察

８名の実践者に共通するのは本人による自己実現の熱意である。好きなことや興味のあることを小さく始めて経験を重ね、成功体験を得るにつれて周囲との関係が膨らんでいく様子が伺える。

取材内容の視覚化

就職し、労働組合にさそわれる。カウンセラー的な役割で、3000 人の人と話す	仕事に落ち着き、同級にからあげの会に連れていってもらう 掛声：から、あげ－！	からあげの会で「料理がうまい」と言ったら、参加者の川村さんから「空きキッチンがあるから料理を出したら？」と言われる	まっちゃん食堂を開催する	まっちゃん食堂に人が集まるようになり、一緒にやりたい人も増え、調理部をつくる	FB のグループ人数が 100 人以上になった	ファイナンシャルプランナーの資格をとる
・就職 ・労働組合 ・3000 人の人々	・からあげの会 ・ヤマヤさん（同期） ・暇な生活（ソファ）（5 時間業 9 時就寝）	・川村さん ・空きキッチン ・からあげの会 ・後押し	・得意料理 ・収益ドリンク込み 1000 円 ・基本グループ限定	・まっちゃん食堂 ・Facebook ・看板	・Facebook	・ファイナンシャルプランナーの資格 ・三角リンク ・同世代のプロのファイナンシャルプランナー
色々な価値観に触れると、自分がアップデートされる	・よし、行ってみるか ・何も吸収できていない ・周りに差をつけられる	知らない人を呼び、お金をとったことはないしできっこない。でも川村さんが言うならやってみるか！	得意料理を食べてもらいたい！（趣味の領域）	・一人じゃ対応しきれない ・一緒にワイワイ作るの楽しいな	・参加者が主役で自分はサポート役にまわろう ・自分の料理を食べてもらいたい	出会いが自分の価値を高める。出会いのためには続けない と。収益化させない

▲実践者 A のカスタマージャーニー

活動を持続する理由となった本人が喜しさを感じた体験を抽出

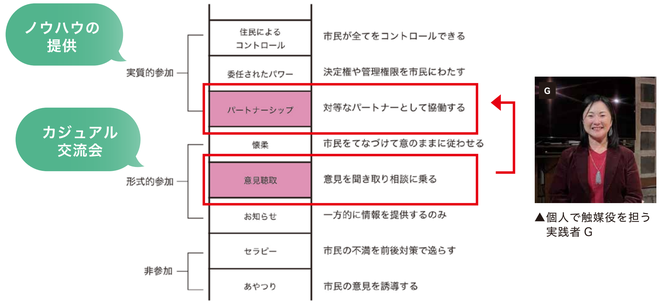
実践者8名	本人が嬉しさを感じた体験
A	運営が 1 人ではできなくなったことで、協力が必要になり、参加者も活動の運営に携わるようになった
B	取り組みたいことを言語化・ディスカッションすることで実施に向けて企画を具体的にした
C	協力者が、学校や事業者に声をかけたことで、多彩な参加者が集まった
D	具体的な数字を決めると、次に行動するための意欲が湧いた
E	少し頑張れば手が届く目標設定によって成果を早くから実感した
F	参加者の発案により、活動の機会が他の場所にも広がった
G	人がやりたいことをヒアリングで聞き出し、必要なものを提案し提供。協力した 活動が実現したところに立ち会えた
H	真面目で堅苦しくない振り返り会をして、自分以外の運営者の意見や考えを聞き出せた

▲実践者の喜しさを感じた体験

３つに分類

3 触媒としての行政の役割

行政はまず意見聴取の場の設計、次いでパートナーシップの構築を目指す。**重要なのは「そっと後押し」する立ち位置であり、自立を目指した精神的な安心感やモチベーションの醸成を目指すこと**である。現実の触媒者が実践していたステップから行政が学ぶことで、共創のあり方が見えてくるといえる。

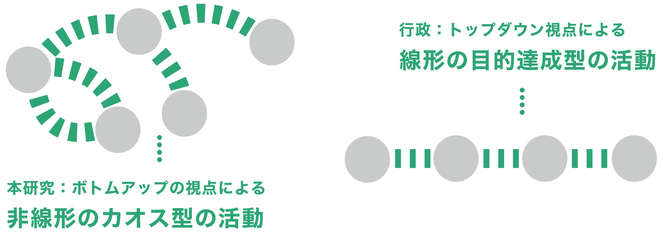


▲個人で触媒役を担う実践者 G

▲シェリー・アーンスタイン「住民参加の梯子」 Sherry.R.Arnstein “A Ladder of Citizen Participation” (1969) 「Journal of American Institute of Planners」Volume 35, pp.216-224

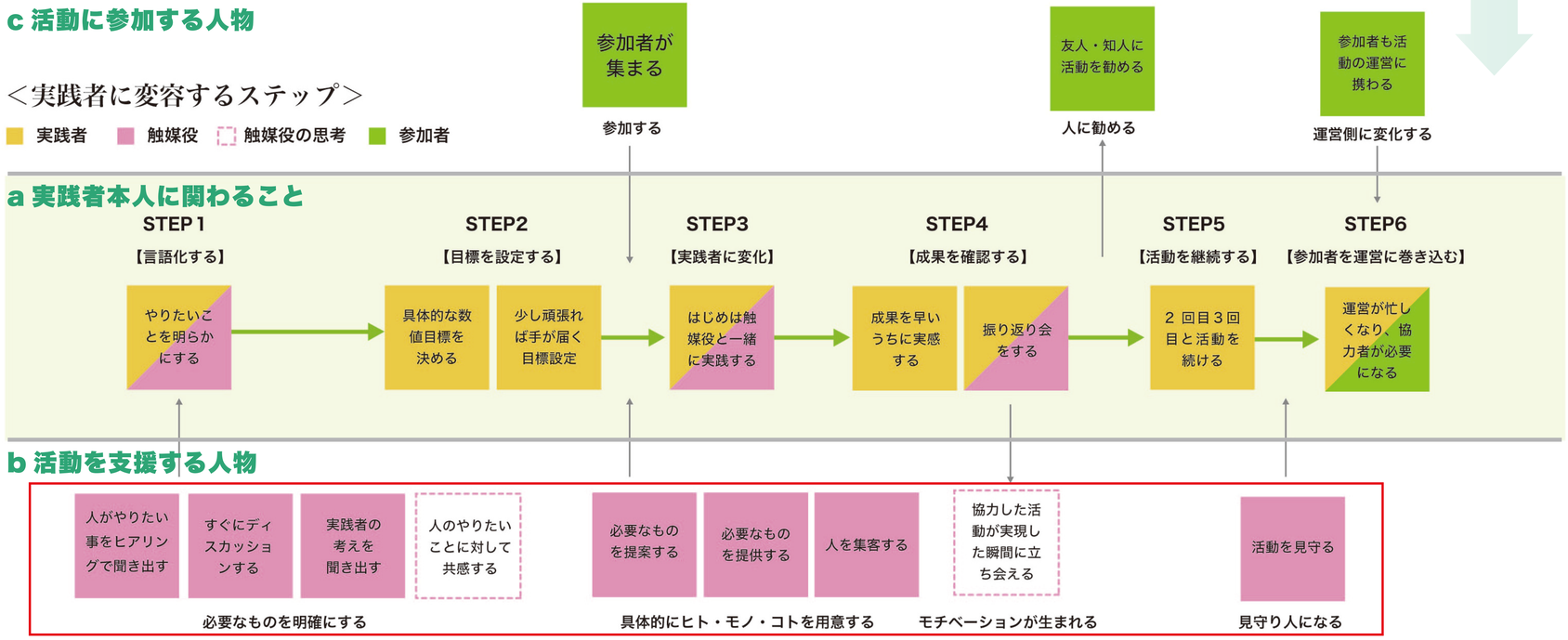
4 行政による評価と計画

筆者らによるリサーチと分析、また行政の役割への提案に対して、行政担当者からは強い共感と今後への期待が寄せられた反面、実際の事業計画への反映が難しい現実も明らかになった。



通常の業務のルールから切り離した運用が期待される

行政が市民共創を専門に研究し実践していく機関を設けるなど



▲変容ステップの図解

支援する人物＝触媒役が変容の鍵を握る